

〈翻訳〉

アメリカン・ボード宣教師文書

—同志社女学校女性宣教師を中心として—

〈スタークウェザー書簡—訳および註—〉(3)

坂	本	清	音	監訳
小	林	弘	美	
松	波	満	江	
檜	本	尚	美	
小	島	紀	子	

書簡翻訳：前号からの続き¹

《425》【小林弘美 訳】

マサチューセッツ州ボストンにて、1878年9月5日、スタークウェザー宛
拝復

7月26日付のお手紙²、確かに受け取り大変興味深く読ませていただきました。多くの点で、あなたの手紙は状況をより良く理解するのに役立ちます。私はあなたの学校に大きな信頼を抱いており、可能な限り最高の基盤の上に学校設立が保障されるために何ができるかに大きな関心をもっています。日本の古都—京都で、男子学生のための同志社英学校の近くに、女学校を設立する重要性は常にここボストンでは理解されています。あなたが置かれている状況は、大阪などの宣教師のものとは異なっているため、異なった方法や計画が好ましいものとなるのです。

ボードでは、すべてを一つの基準とするような普遍のシステムを持ち合わせているわけではなく、それぞれ特定の場所の状況と事情にこちらのやり方

を合わせなければなりません。ボード本部としては、[日本に] 特定の高等教育機関を設立することについては、まだ時期に達していません。

しっかりした基盤の学校は特に何もしなくてもスタートしますが、普通その基盤には真のキリスト教文化の重要性を認める慈悲深いクリスチャン男女の富と祈りがあるのです。私は大阪の試みを大きな関心を持って見守り、よい結果を生むようにと望んでいます。確かにやってみる価値のある試みですが、もし万一目的の最善の利益に逆行するなら、しかるべき時期に気づいて、深刻な結果をもたらさないように注意して下さい。もしそれが首尾よくいけば、同じような状況の別の企画に対して、その試みは大いに参考になるでしょう。大阪には教育の働きを即座に担うことのできる教会³がありますが、京都にはありません。私の知るところでは、京都の教会は主に英学校の生徒と、比較的低い階層の人々で成り立っています。京都の英学校は京都のためだけでなく、「日本ミッション」のためにあり、京都ホームもまた京都のためだけでなく、ミッションのためにあります。二つの学校は京都の教会とは決定的に異なる施設です。しかし今は、そのことについてこれ以上とやかく申す積りはありません。ただ常にここボストンの本部では、あなたがた京都の宣教師たちの判断はいつも入念に考察されていることだけを書き留めておきます。

もし首尾よくいかなかったら、女学校の建物を同志社英学校のために転用することも出来るという私の見解に、動揺しておられるようですね。私はすべてのあり得る不測の事態を見ているのであり、そのような結果を予期しているのではないし、もしそのような結果が起こったとしても特には驚かない、との意であることを心に留めて置いてください。どんな反対にも心配したり、心を煩わせたりしないようになりました。あちこちの反対に構わず、神の義は前進するのです。女学校は、たとえ京都で設立されなくても設立されるはずですし、京都でその計画を成功させるのを私は決して諦めていません。本国から女性宣教師が送られて運営される学校は、その数が三人⁴だろうが、

二人だろうが、一人だろうが、何らかの形で続いていくはずです。きっと大成功となるでしょう。年次大会が間近かなので、今これ以上詳しい手紙を書く余裕はありません。私が今お伝えしたいのは、[あなたの学校の] 1878年の成功に対して心からの関心を持っていることと、その成功によってもたらされる、ゆるぎない自信をあなたに請け合うことだけです。

パーミリーさんとウィルソンさんにどうぞよろしく。お二人から便りがあれば嬉しいし、こちらからも書きたいです。ただし、多くの心配事のプレッシャーがなければですが。デイヴィス御一家、ラーネッド御一家、京都で主を愛する皆さまによろしく。

敬具

N. G. クラーク

追伸：ラーネッド夫人に、夫人の函館訪問に先立ち、私たちはただご夫人の健康だけを願っていますと、あなたからお伝えください。

- 1 今回から、坂本清音編著・ジュリエット・W・カーペンター訳『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（1876年－1893年）－アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして－』上巻（同志社女子大学、2010）に収録の英文書簡（坂本清音解説）資料を使用し、アメリカン・ボード総幹事クラーク（Nathaniel G. Clark, 1825-1896）からスタークウェザー宛の書簡も含めて翻訳していく。
なお、原則として、日本からの書簡に対応するクラークの返信は、発信日にこだわらず、当該書簡の直後に掲載する。
クラーク書簡の番号は《 》で表示する。
- 2 スタークウェザー書簡〈243〉（1878年7月26日付）【*Asphodel* 45, pp.316-325】参照。
- 3 梅本町公会（1874年創設、M. L. Gordon が初代仮牧師）と浪花公会（1877年澤山保羅が創設、日本初の自給教会）を指す。
- 4 Alice J. Starkweather (1849-?), Frances H. Parmelee (1852-1933)、Julia Wilson (1845-?) を指す。パーミリーとウィルソンの京都居住許可がすぐに下りたら、京都には3人の女性宣教師がいることになるはずであった。スタークウェザー書簡〈241〉の註4【*Asphodel* 45, pp.310-311】参照。

〈77〉【松波満江 訳】

京都から7マイルの比叡山にて、1878年8月12日、アビー・チャイルド宛¹
拝啓

直接の仕事や慣れ親しんだ生徒たちから離れるのはつらいことですが、下界のどうしようもない暑さと湿気を逃れ、ここにこんなにも快適で涼しい休息の場を見つけられたのは本当に大きな恵みです。

例年になく長い梅雨のため、夏休みはとても短く感じられます。今、手にしている完全な休養（最後で唯一の休養の機会）と、秋から始まる仕事のプランはこの休みに深くかかわっていますので、一瞬一瞬をととても大切にしていることはお分かりいただけることでしょう。

2～3日前に、タルカットとダッドレー²が富士山からの帰りに立ち寄ってくれました。京都で1泊した後、私たちの忠実な使用人夫婦の世話で、女学校はよく管理されていると言ってくれました。すでにボストンの皆さまに書きましたように、私は有馬でのミッション会議から戻った後、新しい建物へ最後の品々を移すという作業に、独りで出来るだけ気を滅入らせずに取り掛かりました。

ご存知のようにパーミリーとウィルソンはまだ〔京都在住の〕許可が下りないので有馬に残っています。このために捧げて下さっている皆さまの祈りに深く感謝いたします。この地で仕事にいつまでも妨害が続くと思っておられません。秋には、次にこちらに派遣される宣教師の在住許可が是非共もらえることを願っておりますし、同時にこの二人の姉妹のための再申請が、おそらく一緒に、できるだけ目立たない形でなされることでしょう。このことから日本を見ただけでも、キリストの大義に対してはどのような敗北も認めない、偉大で勢いよく流れ続ける進歩の力を感じずにはいられません。ましてや京都で始められた、異教の少女たちのためのこの仕事の発端を考えてみますと、それは、最初はただ聖霊の直接の働きによってニューイングランドの多くの姉妹の心に芽生え、聖霊の力によって進められているものなのです

が、これが神のご意志であることに疑いの影もございません。人間の不完全さは妨げになっても仕方ありませんが、神のご計画を覆すことはできません。この言葉はありきたりのように思われるかもしれませんが、悪魔の力が崩れ去るのを目前で見ているここ日本では、私たちが本国で感じたよりももっともっと深い意味を持っているのです。この国の姉妹たちを救うために神がなされようとしている膨大な仕事の重みが、圧倒的な力で私に迫ってきます。神の大きなご計画とご意思を恐れはしませんし、私の祈りと、祈りによって増し加わる重荷とは、私たち全てが神の働きの中に受け入れられるにふさわしい者として入っていくためのものなのです。私たちのために祈っていただくのに祈り過ぎということはありません。どうかもっともっとお祈り下さい。そこにこそ私たちの力はあるのですから。

ラーネッド教授が新校舎の図面を送って下さったと知ってありがたく思いました。私も写真と一緒に送りたいと思っていましたが、最後の雑事に取り紛れて送ることができませんでした。

なので、14～5歳の愛しい女生徒³の書いた日常生活のメモをお送り致します。私たちは、この生徒の健康をととても気に掛けております。故郷熊本にいる時の彼女は、夜の12時まで勉強し、夜中の3時に起きてまた勉強を再開するという日常でした。華奢で運動不足の13歳の少女には、これは過度のストレスとなりました。日本人は運動ということは何も分かっています。彼女は学問の進んだ生徒として私たちのところにやって来ましたが、なんという犠牲を払っていたことでしょう。彼女の信仰は本物です。兄⁴もまた優秀な伝道者であり素晴らしい生徒です。少女たちの身体の鍛錬は、肉体に宿る魂の鍛錬と相俟って大切なことです。新校舎は特に健康には良い場所にありません。最新号の新聞(『七一雑報』⁵)がちょうど届きました。今夏の生徒たちの伝道記事が掲載されていて、読みたくて待ちきれません。現在マサチューセッツ州スプリングフィールドで勉強中の若き大名岡部さん⁶の故郷を訪れた新島氏の記事もあります。

それについてはちょうど1週間前、新島氏が夫人を伴って来られた時に直接伺いました。夫人は今日の午前中、私たちと同じテントを使って楽しく過ごした後に帰宅されました。聴衆の数が30人から始まって100人以上に増えたこともお耳に入っていることでしょう。自身でキリストに目覚めてからの岡部氏は、郷里の人々をキリストの教えに導くのにアメリカと日本の両方で骨身を惜しみませんでした。郷里に手紙を書き、また新島氏にも書いて、そこで教えを説くために彼が行くか他の誰かを送ってくれるように頼みました。それが彼の捧げた初穂となったのです。最初は身分の高い学識のある男性だけがやって来ましたが、新島氏が「この宗教は男性と同様に女性のためのものである」と話された結果、それぞれ100人以上の女性が出席する会が2回も催されました。彼が岸和田を去る前に「神様は心をご覧になるのであって、顔や立派な着物に関心を払ってはいらっしゃいません」と言うには、かなりの気遣いが必要だったに違いありません。なぜなら、彼女たちはお化粧をして豪華な着物を着て現れたからです。ここで一緒に夏を過ごしているグループ⁷は、秋からそこで働くために新島夫人と一緒に出掛けることを楽しみにしています。

同志社英学校の生徒が7月15日に東京で開かれた信徒大会⁸で非常に良い印象を与えたそうです。心からの信仰はもちろん賞賛と驚嘆さえも喚起しました。

私たちはジョセフ・クック⁹の著作と、愛する母が好きな説教家「カーク博士の生涯」を一緒に読み味わっています。日頃読書を心掛けてはいるのですが、ほとんど唯一大いに読書ができるのは夏だけです。

家が遠すぎて帰れない少女3人を、学校から一緒に山へ連れてきました。市内で彼女たちの世話をしてくれるキリスト教信者を見つけられなかったからです。その内の1人は「無事に自分を連れて行ってくれるというイエスを信じて」1人で400マイル〔約650キロ〕の距離をやって来て、聖書の勉強で目覚ましい進歩を遂げています。わずか13歳半ですが、素晴らしい日本人生

徒です。もう1人は学校での1年間で驚くべき進歩をなし、すでに大変信頼できる有能な助手となっています。妹が学校に来る許しを得るために一生懸命祈り、家に手紙を書いています。母親はキリスト教を信じる一歩手前ですが、父親が邪魔をしているのです。500マイル〔約800キロ〕離れた新潟からやってきた若い既婚女性¹⁰は、3年間聖書と英語と音楽の勉強をしていたのですが、夫と一緒に郷里での伝道生活に戻るようにとの神からの召命を聴き、しかも、その召命がとても緊急だったので、私たちは二人の旅の無事を祈るしかありませんでした。この夫婦は4年前にキリスト教徒になりましたが、親戚が彼らの手紙に返事をくれず、二人は全く縁を切られた状態です。

昨年学校にいた少女は全部で13名です。少女たちの名前とその意味をお聞きいただけますでしょうか？

おみやさん¹¹ （「お」は敬称、「さん」は人名につける。Missにあたる）
“神社”

おみねさん¹² “山の頂上”

おしづさん¹³

おはるさん¹⁴ “春”

おかねさん¹⁵ “金銭”

おくめさん

おすえさん(1)¹⁶ “終わり”

おいそさん¹⁷

おゆきえさん¹⁸ “雪”

おたせさん¹⁹

おせんさん²⁰ “香”

おすえさん(2)

おやすさん²¹ “平和”

昨年のミッション年会の投票によって、生徒の数が寄宿生14名、通学生6名に制限されたことはご存知の通りです。学校経営の「自給」を強制しよう

としたり、授業料の値上げをするのは、私たちから多くの歓迎されるべき生徒を遠ざけることになり、ゆくゆくは損失をもたらします。現時点では小さな事柄でも、最終的に致命的になるような重大な間違いを犯さないためには大いなる英知が必要です。

ここにはキリストのために働き、貴重な魂をキリスト教信仰に導くことを切望している熱心で温かい心の人々がいることを知っています。皆さま方の働きは無駄ではありません。この輝く生徒たちの顔を覗きみると、迷える人をキリストの許に導く仕事を分かち合うために、私たちを日本へ送り出し、祈り、同情し、親切で飽くことのない支援をしてくださることに對し、神様やあなた方アメリカの姉妹たちにどれほどの感謝の気持ちを抱くことでしょうか。

近い内に、お返事がいただけますように。

敬具

アリス・J・スタークウェザー

京都 日本

追伸：グールドィからあなた様へのお願いです。住所がわからないので同封の物を転送して下さるようにとのことです。

- 1 Miss Abbie B. Child スタークウェザーの書簡(74)の註1【*Asphodel* 45, p.302】参照。
- 2 Eliza Talcott (1836-1911) と Julia Elizabeth Dudley (1840-1906) スタークウェザー書簡(241)の註3【*Asphodel* 45, p.310】参照。
- 3 横井宮(1862-1952) スタークウェザー書簡(74)の註16【*Asphodel* 45, p.304】参照。
- 4 横井時雄(1857-1927) スタークウェザー書簡(74)の註14【*Asphodel* 45, p.303】参照。
- 5 『七一雑報』日本最初のキリスト教週刊新聞。新聞紙条例(1875, 6.28公布)により、表面上は日本人今村謙吉、村上俊吉が編集長であるが、実質はアメリカン・ボード(O. H. ギューリック)が経営、出版した新聞。1875年12月27日創刊。

- 6 岡部長職 (1855-1925) スタークウェザー書簡〈76〉の註1【*Asphodel* 45, p.326】参照。
- 7 Mary Elizabeth Gouldy (1843-1925) 大阪最初の独身女性宣教師。1874年来日。
- 8 1878年7月15日～17日、東京築地の新栄教会で、第1回全国基督信徒大親睦会が開催された。
- 9 Joseph Cook (1838-1901) アメリカの伝道者。日本には、1882年4月に来訪。東京、横浜、名古屋、京都、神戸、大阪、長崎の各地で講演を行った。
- 10 陶山たせ スタークウェザー書簡〈242〉の註4【*Asphodel* 45, p.316】参照。
- 11 横井宮 註3参照。
- 12 山本峯 (1862-1887) スタークウェザー書簡〈242〉の註2【*Asphodel* 45, p.316】参照。
- 13 大西静 (伊勢出身)
- 14 本間春 スタークウェザー書簡〈240〉の註13、14【*Asphodel* 45, pp.296-297】参照。
- 15 江波カネ (上州出身)
- 16 下村末 下村孝太郎の妹。
- 17 近松磯または西村磯 (何れも滋賀県出身)
- 18 曲直瀬または真瀬雪枝 (公卿家の士族令嬢)
- 19 陶山たせ 註10参照。
- 20 高松仙 (?-1892) スタークウェザー書簡〈240〉の註1【*Asphodel* 45, p.316】参照。
- 21 斉藤安 (加茂の百姓の娘)

〈77-A〉【榎本尚美 訳】

日本の京都から7マイル離れた比叡山にて、1878年8月28日、チャイルド宛
拝啓

今日から2週間後には京都に戻りたいと思います。ここ比叡山での休暇の日々は、非常に充実していますが、ただあまりにも短か過ぎます。でも、私たちに必要な全てを蓄え、来たときよりも更に豊かにされ、仕事のために更にふさわしいものとなって戻るための休暇です。この休暇がどうしても必要だということだけが、仕事から離れることを甘んじて受けさせていますが、私たちは再び仕事に戻りたいと切に願っています。山を下りて神の力に頼る

ことにおいてのみ、神の意にかなう仕事が少しでもできるという思いが、私にはますます募ってきます。

昨日、京都府権知事の中村さん¹が中央政府に辞任を申し出た（そのことは、信頼される筋から報道され、一般に信じられています）と聞き、とてもうれしく思いました。これは多分間もなく天皇が上洛されるときに発効となるでしょう。彼〔楨村〕の解任に向けて何もなされないとか、自分で振る舞いを改めないならば、日本人自らが、中央政府にその暴政を訴え強硬手段をとると脅していることは周知のことです。知事は東京から訓告を受けていたと言われていますし、何もかも大久保首相²が暗殺された前後に起こったことなので、彼が反省の機会を持ったのも当然のことでしょう。私たちがここ比叡山で夏を過ごすという予期せぬ許可を得られたのも、この影響であると充分考えられます。新島氏が有馬での宣教師会議の席上で許可が得られたと公表したとき、非常に長い間待った後でしたから、それは心からの拍手喝采で受け止められましたし、他ならぬ私たちが一番驚いておりました。知事辞任の承認までの今この期間こそ、真剣に祈るに極めてふさわしい時だと思えます。彼以上に「暗く」³て厳しい異教徒の役人が知事に任命されることがあるとは考えられません。

ご存知のように、ここ京都の町は歴史の長い要塞地であり、知事の強い影響下にあるため、公立小学校が日曜日も休みになっていないのは、日本中でここだけと聞いています。ここもやがて変わることを待ち望むのみです。変われば、ここでのミッションの日曜学校の仕事にも大きな効果を及ぼすに違いありません。今のところ、日曜学校に子供たちは、夕方だけしか集められませんから。しかしながら、望むべき第1の恵みは、地方行政から〔キリスト教に対する〕偏見を持った影響力がなくなるということです。そうなれば秋には、中央政府に新しい宣教師や、もちろんパーミリーとウィルソンも京都に残れるようにと、在留許可が申請されるでしょう。特に二人には最も身近なこととして関心を持っています。しかしまさに日本では、あらゆる関係

において、特に「互いに身体の一部」⁴なのですが。

今マサチューセッツ州のスプリングフィールドで勉強している若き大名岡部さんの故郷を訪問した新島氏の話については、その全容をお聞きおよびのことでしょう。彼の熱心な要請に応じて、新島氏は「岡部氏の同郷人」に話に出かけたのです。集会は5回あるいはそれ以上だったようですが、生徒、近所の人、裕福な家来などがたくさん出て来て、しかもその数は増えていったということです。そのことは、若い大名だけでなく大洋の両側⁵にいる全てのクリスチャンにとっても、喜ばしいことに違いありません。

最終の、女性のための二つの集会それぞれに、この地の100人もの姉妹たちが集まった光景は、特に喜ばしいものだったに違いありません。新島氏の仕事をずっと引き継いで伝道を行っている山崎氏⁶からの最近の手紙では、40～50人の常連の聴衆が週に4回来ていることが分かります。この中の1回は、女性のためのものなのです。

聴衆の中には多くの学生がいて、必ず同志社英学校に来ると言っている人もいます。もちろん、多くの娘たちを同志社女学校に送ろうという気持ちになるのは、[同志社英学校へのそれと比べると]ずっとスローペースの筈です。新島氏が「この宗教は男性のためだけでなく、女性のためのものでもある」と宣言した最初の人になられて本当によかったです。その宣言が生み出した100人の姉妹はこれからの伝道対象の希望となりました。すでに、ある父親は娘の入学が許可され、できるだけ早くキリスト教の感化の下に置かれるようにと懇願しています。また[在学中の]最も愛らしいクリスチャン女生徒の両親は、1年半前は、娘の許婚の執拗な頼みに対して、「娘を教育してもらうために学校に送る親なんて誰もいない。ましてや、キリスト教の学校になんてとんでもない」と言っていたのです。残念ながら、これが一般的な考え方なのです。

昨日訪ねてきた別の男子生徒は同様の葛藤ののち、うまく13歳の妹を連れ戻って帰ることが出来ました。家では大変な働き者で、[家族は]精神的・

靈的備えに無理解だったのですから、彼女が家を出ることが大きな損失のように思われたとしても何ら不思議ではありません。

私たちの女学校生徒に対しては、裁縫や家事が下手になることのないように絶えず教え練習させ、ますます上達するよう特別に苦心しています。この若い女性たちの心を「暗い」世界から解き放ち「生命と光」をもたらすことは、何という特権でしょう。アメリカにいるあなた方には、ここでの大変さはおよそお分かりにならないでしょうし、ここからでは、言葉でもペンでも分かりやすく伝えることはできません。時々考えるのですが、私たちでさえその哀しみを完全に実感することが出来ないのは、思いやり深い神の恵みののだと。

非常に信仰心が強く、行動的で若い15歳くらいの青年が最近大きな試練にさらされました。昨年、この青年は「ハハキトク」の電報で家に呼び戻されました。本人も友人も、これは「家に呼び戻すための策略」かも知れないと心配しましたが、もし本当であって帰らなければ、「自分を許すことができなくなる」と言って、彼は600マイル（約960キロ）離れた自宅に向かいました。しかしその前に、母は暗闇の中で[神を信じられないまま]この世を去っており、母の顔に永遠に相見えることは出来なかったのです。彼には魅力ある兄だけが残り、何ヶ月か後に兄を同志社英学校に連れてくることに成功しました。その兄は、私たちがミッション会議で留守の間にとても痛ましい死を遂げましたが、信仰をより深めて「我が家」に帰ると嬉しそうに話したという喜ばしい証を残してくれました。弟は、本当は兄が神のもとで安らかに眠っていないのではないかと悲しみと恐れで半病人になっていました。もともと弱かった彼の目は、気の毒に今やほとんど異常なほどに腫れあがっていました。そして、この最後の絆を断たれた兄との別れは、とても耐えられるものではないように見えました。

次に私たちが聞いたことは、生存中のおじが彼を訪ねて来て、戻って自分の娘と結婚し家を継ぐようにと言い張ったということでした。その娘は、も

ちろんその青年の従妹にあたり、12歳か13歳の若い子なのです。暗い所から解き放たれていた15歳の青年は勇敢にも抵抗しました。彼を連れ戻したときのおじの意志は不動のものに思えましたが、最後にはこの青年が勝利を収めるだろうと私は確信していました。グールディの日本語の先生になっている海老名氏⁷に、たった今、結果はどうなったかと尋ねたところ、その青年は勝利を得て、海辺にある岡部大名の故郷岸和田で24人の生徒たちと一緒に少し休養をとっているそうです。グールディ（今、私と一緒にいます）と新島夫人は、女性のための仕事をするために、来月、その岸和田に行く予定です。

今ここに来ている海老名氏はこの5ヶ月間、安中ですばらしい働きをしています。そこは覚えていらっしゃるかと思いますが、新島氏の故郷です。新島氏が当地に設立した教会で受洗した少女が8人いましたが、みんな女学校に行くことを強く望んでいます。特に「聖書の教えが忘れられない」と言う一人は、[京都へ]行きたいと激しく泣きましたが、両親を亡くしているので、反対する姉の声に邪魔されそうに思えます。

皆さま方に、比叡山の「広大な全景」や比叡山にまつわる有名な話の概略を是非ともお知らせしたいものです。

敬具

アリス・J・スタークウェザー

追伸：差支えなければ、クラーク博士にこれをお読みいただきたいのですが。

A. J. S

- 1 「中村」はスタークウェザーの書き間違い。榎村正直（1834-1896）のこと。榎村は、長州出身。1875年7月に京都府権知事となり、1877年1月には京都府知事に就任した。東京遷都後の京都復興に尽力した。
- 2 大久保利通（1830-1878）明治維新政府成立後、参議、大蔵卿を経て、1873年初代内務卿に就任。その近代化、欧化政策は旧士族の怨嗟を買い、1878年5月、暗殺された。なお、スタークウェザーは「首相」にあたる言葉を使っているが、大久保利通は首相にはなっていない。また、初代首相伊藤博文の就任は1885年のこ

とである。

- 3 信仰のない人が、dark (暗い) と形容される。
- 4 「エフェソの信徒への手紙」 4 : 25
- 5 太平洋兩岸のアメリカと日本のこと。
- 6 山崎為徳 (1857-1881) 1875年、熊本洋学校を卒業後、東京の開成学校に学ぶが、やがて同志社英学校に転校した。1879年6月卒業後、同志社教授兼幹事として新島を助けたが、病に侵され、早世。
- 7 海老名弾正 スタークウェザー書簡〈76〉の註3【*Asphodel* 45, p.326】参照。

〈78〉【小島紀子 訳】

日本の京都にて、1878年10月4日、チャイルド宛

拝啓

学校は現在かなり安定した状態にあり、寄宿生の数はぎりぎり一杯¹で、あと4名の通学生がいます。全員熱心に学んでおり、明らかにクリスチャンになる積りで来ました。

非常に嬉しいことに、ラーネッド夫妻²は今女学校に住んでおられ、夫人は生徒たちの家事の面倒をみ、「小さな車 [女学校]」を円滑に走らせてくれています。女生徒たちが家事をする利点は明らかで、それに費やされている苦労は、十分報いられるに違いありません。

暑くなる前に、残っていた最後の用事を終わらせることができず、それが開校準備に伴う諸々の仕事に加わりましたが、私たちはとても満足しており、成功する年になると予想しています。新島夫人の母親³がしばらくの間来て、女生徒たちが炊事する世話をし、食料を買うのを手伝ってくれます。大助かりです。彼女はまた、女生徒たちが散歩や親睦のために出かける時⁴に一緒に外出してくれます。10月1日水曜日の夕方、ステーションの定期祈祷会が新島氏の新居⁵で行われました。

先週の会もここで行われ、実際私たちには感謝する理由が十分あると感じました。新島氏の特別な友人たちが、大いに必要とされた家にいる彼を見、その家に対して神の恵みがあるようにと祈り、また、この「神からの」贈り

物に対して心からの感謝を表す真剣で信頼に満ちた祈りが捧げられるのをお聞き下さればと願います。

私たちはゴードン博士⁶一家の在住許可と、続いて、残りの人たちの許可も、すぐに下りることを心から待ち望んでいます。

今、祈祷会に集まっています。人数は少ないのですが、神は私たちと共にいて下さり、御業を遂行されるために今は別の器を用いてくださっているのだと強く感じています。

昨日届いた私の先生〔本間重慶〕からの手紙には、琵琶湖北部の彦根に到着したことが記されています。彦根は、テイラー博士⁷が最初に訪れたところです。本間先生は当地の人々に支えられて、その地で1年間仕事に従事することになりました。そこには、まだ、教会がありません。200名の聴衆が話を聞きに集まって来ています。ある男性は安息日ごとに話を聞くために9マイル（約14キロ）歩いて来ます。彦根はアウトステーション活動の拠点となる見込みがあります。その地区の八日市には6名の信者がいますが、3人は一家全員で、残りは5人家族の内の3名です。

学校での私の仕事は最善の力を必要とします。だから、立派にやるためには、もちろん外の仕事⁸に注意を向けることはほとんどできません。私たちは神の恩寵や知恵を必要とする不滅の基盤を築いているのだと、ますます確信しています。

全員がグッドリッチ夫人の死亡の知らせ⁹で非常に心が動揺し悲しんでいます。詳細はまだ何も受け取っていません。希望に満ちてこれからの仕事に入って行く彼女に、道中の安全を祈って別れたのは、ほんの昨日のこのようです。一体どういう状況だったのかを知りたいと思っています。

ボードの会議があった今週中ずっと、どれほど私たちの思いが、皆さまや今、洋上にいる友人たち〔日本に向かっている宣教師たち〕と共にあったことでしょう！

8日：涼しくて、快適なくらい気持ちのいい日でした。次のお手紙では、

よい知らせがありますようにと待ち望んでいます。

敬具

アリス・J・スタークウェザー

- 1 スタークウェザー書簡〈243〉の註9【*Asphodel* 45, p.325】参照。「14名になった」の意。
- 2 Dwight Whitney Learned (1848-1943) 創設期の同志社を支えた宣教師の1人。1875年来日、帰国するまで53年間、J. D. デイヴィスとともに同志社の礎を築いた。妻の Florence Helen Learned (1857-1940) は宣教師夫人として、同志社女学校および幼稚園での教育に力を注いだ。
- 3 山本覚馬、八重の母、山本さくのこと。パーミリーとウイルソンに京都在住の許可が下りないので、その間だけ臨時にという形で、女学校の舎監と賄方を務めていた。
- 4 女学校では当時、4時から5時まで散歩の時間であった。
- 5 新島と同様、ハーディ夫妻が養父母となっていた J. M. シアーズからの送金によって新築した新島の自宅。現新島旧邸。当時新島宅を会場にしたのは、西京第二公会であった。
- 6 Marquis Lafayette Gordon (1843-1900) 1872年来日。デイヴィス、ラーネッドと並んで、初期の同志社を支えた宣教師。同志社在任は1879年から1899年までの20年間である。1875年、京都訪問時、山本覚馬に『天道湖原』を贈った。妻 Agnes Helen (1852-1940) は、後に相愛幼稚園の初代園長に就任。この当時のゴードン夫妻には、長女 Fanny (4歳) と長男 Donald (1歳) がいた。
- 7 Wallace Taylor (1835-1923) 1874年来日。1876年京都着任。医療宣教師。同志社で教えるかたわら、医療伝道に従事したが、その医術開業が問題となり、1878年には府庁の命により、京都を去り大阪へ移った。
- 8 学校の外へ出た直接伝道のこと。当時、学校教育を通しての伝道と直接伝道の両方が必要とされていた。スタークウェザーもそのことは十分に理解していたが、1人では学校のことだけで手一杯で、どうすることもできなかった。
- 9 Justina Emily Wheeler (?-1878) は、1878年5月、来日中の北中国ミッションの C. L. Goodrich 宣教師と結婚。中国へ旅立った。8月19日から当地で3日間働き、12日間病床に就いて、不帰の人となった。原因は赤痢であった。

〈244〉【小島紀子 訳】

日本の京都にて、1878年10月19日、クラーク博士宛
拝啓

前回のお便り、非常に嬉しく頂戴しました。あなた様からよろしくのお言葉を、ここ私たちの女学校で直ちにラーネッド夫妻に伝えることができ、本当に嬉しく思います。ご存知のとおり、ここで夫妻はパーミリーとウィルソンが留守にしている間¹、家の切り盛りをして下さっています。

ラーネッド夫人はすこぶる元気を取り戻されて²おり、非常に楽しそうです。私をも楽しい気分にさせてくれることは、言うまでもありません。夫人は、毎日とても規則正しく外出し、途中で、学校のための用事を済ませて下さいます。夫人と私は少なくとも土曜の午後は一緒に長い距離を歩き、できる限り山登りに挑戦するつもりです。彼女にはここ京都にいて健康を取り戻すというやり方が与えられて、本当に良かったです。

私たちは、明日横浜に着く予定の汽船の到着の知らせを今か今かと待っています。船が神戸に着く³次の日には、全員で集まりたいと思っています。その他のことはだいたいお分かりだと思いますが、会は聖餐式で終わります。そして半年に一度の親睦と祈祷の会を開始するつもりです。そのような祈祷会の必要を大いに感じています。神は、ここ日本で、数百万もの人々を真に目覚めさせておられます。いずれ明石教会⁴の創立についての知らせが届くことでしょう。

以前の【日本語の】先生【本間重慶】が、今週美しい琵琶湖の北にある彦根でのよき働きについて手紙をくれました。明日は先生の彦根での3回目の安息日です。そこで先生は1年間働くべく地元の人々によって雇われました。【英学校の】生徒たちが昨年時々そこで働いてきました。既婚女性2人⁵（1人は医者⁶の妻⁶）と若い女性1人が彦根から私たちの学校に来ています。もう1人の既婚女性の夫と、他に3名の男性が同志社英学校に来ました。先生の手紙には、数名の医者⁷と他の悪名高い人物たち⁷が、ほとんど奇跡的に

罪を悟り悪の道から悔い改めるように導かれ、今や他の人が自分たちの過去の例を真似ないよう説いていると書いてあります。50名から70名が毎夜「心から耳を傾ける」⁸聴衆になっています。

先生はかなり根気よくドーン氏⁹の音楽教育を改良し、彦根に行つて以来、子どもたちに毎日午後音楽を教えています。先生は午前8時から10時まで、ある医者¹⁰の家で聖書の釈義をしています。午後3時から5時まで英語を教えることは、彼が現金を得るのに役立っています。7時から9時までは説教をします。ある男性は、オルガン（この人は、まだ一度も見たことがないと思うのですが）を是非とも手に入れたいと思い、家財と衣類を売却して合計40ドルほどを作り、そのお金で皆がまもなく設立したいと望んでいる教会用のオルガンが買えるかどうか尋ねています。彼は妻と娘に演奏を習ってほしいと思っています。

私たちの学校では、伝道者の許婚〔本間春〕が教会用のほぼ全ての讚美歌を、今ではとても上手に演奏してくれます。ジュリア・ギューリック¹¹とジョン・ギューリック氏¹²が今日彦根に向けて京都を出発しました。本間先生は私の先生である前は、ジュリアの先生でした。

先週の安息日、京都の3公会では合同の非常に喜ばしい聖餐式が行われ¹³、私たちの生徒の1人が受洗をしました。この生徒は安中での宣教の果実の1人で、もう1人はここに来る少し前に洗礼を受けています。

2～3週間前にグリーン氏¹⁴が訪れた〔新島の〕教会¹⁵の様子について、私たちが大いに楽しんだその報告はきっとグリーン氏から受け取られることでしょう。新島氏は今日、自分の家の写真を撮ってもらっていました。その写真はいずれご覧いただけることと思います。私は新島家に行ったり前を通ったりする時には必ず2度注目します。1度は私たちと共にあの親切な家族〔新島一家〕のことを愛を持って心にかけてお祈りに加えてくださる皆さま方のためです。この秋、「京都ホーム」の写真を送るとお約束しましたが、低木の植え込みが育つのを待つほうがいいという意見もあり、またパーミリーとウィ

ルソンがまだここペランダに姿を見せることが出来ないのもうしばらく待つことに甘んじていようと思います。

聖霊が日々新たに十分に降り注ぐことをどれほど切望していることでしょう。そこに私たちの力があります。私たちの所にやって来る一人ひとりによって、まさにこの力がもっともっと増し加わりますように。皆さまの絶えることなく高まる祈りの尊さを必ずお伝えください。私たちはここでそれを確かに感じているのです。

敬具

アリス・J・スタークウェザー

- 1 パーミリーとウイルソンは、一時パスで京都にとどまっていたが、それは20日毎に更新が必要であった。この時期、2人は有馬にいる。
- 2 体調を崩したラーネッド夫人は、1人で大阪や神戸で療養したり、夏には夫妻で函館で過ごしたりしていた。10月になって京都に戻り、彼らの家が建つまで、新築なった女学校に住むことになった。
- 3 Robert Henry Davis (1844-1899) 夫妻、James Horace Pettee (1851-1920) 夫妻、女性宣教師 Fannie Adelia Gardner (1849-1930) が、1878年10月26日に神戸に到着した。
- 4 1878年10月15日創立。宣教師 John Laidlaw Atkinson (1842-1908) から受洗した19名の信徒をもって設立された。
- 5 樋口房子と西村磯子のことか（本間重慶、史料「同志社女学校初期時代」『同志社校友同窓会報』第18号、1928年3月15日、9頁）
- 6 樋口房子は医師樋口三郎の妻で、彦根教会創立の日に夫婦で受洗している（『彦根教会創立百年誌』1979年、10頁）
- 7 代表的な人物が三谷岩吉である。清水次郎長の兄弟分として近畿一円に響いた顔役で、警察も遠慮するほどの勢力を持っていた。しかし、キリスト教を知ると、前非を悔いて聖なる愛の世界に生まれ変わった。1879年、彦根教会創立者の1人となり、第1回受洗者12名の中に名を連ねた。
- 8 「マタイによる福音書」13：15参照
- 9 Edward Topping Doane (1820-1890) デイヴィス、ラーネッドらと共に創設期の同志社で働いた宣教師。讃美歌指導に優れ、同志社最初の音楽教師である。ミクロネシアで伝道に従事していたが、妻の健康上の理由で京都に来ていた。ドー

ン夫人は、デイヴィス夫人の姉。

- 10 中島宗達 25歳で井伊家の奥医師となり、29歳の時、藩命により横浜のヘボン塾に留学、西洋美術研究に従事した。
- 11 Julia Ann Eliza Gulick (1845-1936) 1874年来日。この頃、女性への伝道のため、神戸から彦根に出かけていた。実兄 O. H. ギューリックと共に、オルガン購入に尽力した。
- 12 John Gulick と書かれているが、彦根のオルガン購入に際して、その注文交渉にあたったのは、ジュリアの次兄 Orramel Hinckley Gulick (1830-1923) 【『彦根教会九十年史』p.7】なので、スタークウェザーの勘違いであろう。なお、John Thomas Gulick (1832-1923) はジュリアの三番目の兄であり、神戸・大阪・新潟で伝道に従事した。
- 13 1876年11月から12月にかけて、京都に相次いで設立された3公会は、それぞれの公会として独立していたが、相互の交流も盛んで、聖餐式は2か月に一度、合同で行っていた。
- 14 Daniel Crosby Greene (1843-1913) スタークウェザー書簡〈241〉の註1 【*Asphodel* 45, p.310】参照。
- 15 スタークウェザー書簡〈78〉の註5参照。

《209》【小島紀子 訳】

ボストン、マサチューセッツにて、1878年12月27日、アリス・J・スタークウェザー宛

拝復

10月19日付の手紙¹を受け取り喜んでいきます。ラーネッド夫人の健康回復について知らせてくれた情報も嬉しく思います。こちらから夫人に日本に留まって、日本で健康回復のために最善を尽くすようアドバイスをするには、若干のためらいはありましたが、どこか京都からの転地で十分で、アメリカに帰る必要はないと言える場所があるに違いないと楽観的に考えていました。帰るよりも残るといふ事実そのものが、彼女の勇氣と希望を支える助けとなったに違いありません。今や、もっと適当な住宅が確保できるのですから、これから引き続き快方に向かうだろうと期待しています。

女学校で受け入れ可能な学生数に課されている制限はもう取り除かれて、

少なくとも自費生を全て受け入れられるようになっていることでしょう。当座はあなたと、共に働く若い同僚が世話や労働で無理をすることのないよう、数を制限するほうがいいと思えました。明らかなことは、日本語に慣れ理解できるようになるには、これまで割り当てられていた、あるいは必要だと思われる以上の時間を新来者には与えなければいけないということです。すべきとわかっており、それをしたい気持ちはあるのに、まだ思うように口で言えない人のイライラは十分にわかりますが、初めの内の忍耐は結局持続と、より大きな成功を保証するのです。

仕事の進み具合が分かるので興味深いのですが、親切に言及してくれている他のことには、今ここで細かく触れることはしません。1通1通が私たちにとても勇気をもたらしますし、この手紙があなたに届く前には政府の制限が取り除かれ、ウィルソンとパーミリーがあなたの女学校に迎え入れられるようにと願っています。

心からの挨拶と、あなたの成功と幸せを願いつつ。

敬具

N. G. クラーク